

消費者を裏切らない ゴルフ工房を目指す現実と裏側

(株)ゴルフギャレーヂ
代表取締役 中井 悦夫

当店に来場されるお客様は、店主と馴染みの方やその紹介者が多く、クラブに対して店主の考えや作業の進め具合を事前にある程度聞いて頂いた上でご来場頂ける。

持ち込まれるクラブ全てを数値測定しなくても、クラブを間近に拝見すると悩み、症状や上手いかない点を間違いなくほとんどが指摘できる。が、同業者として言えない、言ってはならない、すでに施されているおかしな作業内容や構造の不備が存在する事が多々在り、そういう場合は言葉を濁さず大手のナショナルブランドメーカー品には「何かと至らないのは量産品の宿命です」と答え、ゴルフ工房製のクラブには「当店で違う考え方で作り、成果が期待できるクラブになると思います」と、答えてきた。

堰を切ったようにプレーヤー本人から「今、言ってもいない自分の困っている症状が分かるのですか?」と質問され「手短かに測定した数値とチョットした作り方や構造の不備がお悩みのポイントを物語っています」とお答えする。

何がしか作業依頼を賜わり、飛距離や方向性に改善が見られ、打ち易さの変化に満足された結果、それと見合った対価を当方で頂戴するが、一度は完品と疑わずに購入された代物に改めて対価を支払わなければい物にならないという点には矛盾を感じ、「クラフト技術を売る業界側の者」として何か気が引ける思いでやや憂鬱な気分になる。

駆け込み寺とも言える実体験から憂慮すべき思いを数多く経験する。

今、ゴルフ工房は組み立て技術レベルの優劣がまちまちで千差万別あり、小学生レベルの工作水準から工作機械を使ってオリジナルのパーツを用意したり、一線級のゴルファーから信頼を得てリシャフトや組み立て、チューンナップ、メンテナンス作業をする店まで、中味や対応力、技術、経験レベルは様々である。

その店の最良レベルがプレーヤーの求める内容に合致せず、一方でプレーヤーは専門店に薦められた商材、組み立て技法を信頼し、安くもない代金を支払ったクラブでことさら練習し、ラウンドに進出する。クラブフィッティングを受け、別注クラブを製作依頼し作られた、例えばウッドクラブでもドライバーとは全く異なる性格のシャフトがフェアウェイウッドに装着されていたり、アイアンとのコンビネーションをしない重さや硬さ、性格が異なるシャフトが装着されていたり…。

「ドライバーが欲しい!」と、フィッティングにお訪ねになればドライバーだけの試打を散々しても注文される番手、ドライバー以外の手持ちのクラブの調子の良し悪しや、お使いになっているクラブのすべてを数値的に把握したうえで話がなぜ出来ないのであろうか?

まさか、見ても判断できない、または是非とも簡潔に売りたい事情が他にあるのか?

選定に使う試打クラブ個々の内容、スペックの数値計測をもせず、客は単に球を打ち続けシミュレーション機材でスピン量を測ったところで、いくら弾道の安定性を予測したところで、画面上に現れる数値は理

想であって机上の空論である。

以前、偶然持ち込まれた2本のクラブは、同じメーカーのドライバーヘッドが装着されていた。表記ロフトは共に9.5°であったが、リアルロフト・ライ角度、フェースアングルが相当違って、プレーヤーはシャフト特性の違いを体感するため借りた筈が片方は右に飛び出し、片方は左に飛ぶ。

シャフトのしなり戻りの違いを試そうにも、球が捕まると聞いたシャフトが右にスッポ抜け、引っかけ難い筈のシャフトが捕まって飛んで行き、また高さも違えば、当然の如く飛距離もずいぶんと差が出る…。ヘッド個体の違いは見るからに想像できていようと、打ち方を工夫してまではシャフトの特性まで見極められずに、どうにもこうにも訳が分からなくなって来場された事もあった。

また、ヘッド個体ごとの数値を計測もせずには売れ筋の旬のネタを薦めることは正しい事なのか?

地場ブランドのウッドヘッドに限らずナショナルブランドのヘッドも番手や形状に関わらずカタログスペックと個体が持ち合わせるスペックには明らかな乖離がある。

生産国で使用する測定ゲージが、それを物語っているが、大半は本人のパフォーマンスを生かしきれない状況で、打ち易さでは及第点でも伸び代は期待できないアンダースペックな数値内容ばかりである。

店頭の物販のみの売り子、販売員ならば、オーバースペックと思われるクラブを薦めるのは店側として御法度であってもプレーヤー個々の目指す将来のステージを見据え、我々工房のクラフトマンとしては、本人の力量や練習量に見合った、将来のステージで役立つスペックを薦めなければならない筈であろう。ヘッド個体ごとの管理をせず、単に個体に刻印された数値スペックやカタログ値を信用するしかないのは、1本目は先ず先ずでも2本目、3本目に揃えるウッドの番手を追った数値は用意できないばかりか、ドライバーさえ飛距離重視であっても後々、クリークを作りその次にスプーンを作る場合、どうやって出球方向とピッチのとれた飛距離を割り振って揃えるのか?

リアルロフト・フェースアングルは番手を追って合わせて作ることは当たり前であり、見た目の長さやスウィングバランス、重量、振動数を合わせて作るのも当然であり、見せかけだけの信頼を損なうような印字シール1枚にすり替えられた別注クラブは後を絶たない。まさか打ち比べても、打っても分からないから、であればそれは詐欺行為に近い。

スウィングバランスを合わせる手法はいつも注目する部分でありウッドヘッドは先ずヘッド内部への貫通穴がヘッドの何処かに在る訳で、音止め(異音止め)の為に必ずグルー材が充填され出荷されている。

バランスを少なくする場合、グルー材を抜けば良く、増やす場合にはグルー材を充填すれば問題ないのであるが、シャフトの先端に鉛や真鍮の釘状のバランスを入れシャフトが装着されているクラブを多く見受ける。

それはヘッド底部やバックフェース側に備えられたバランス調整、重心位置調整用のアジャストネジ部の

底に存在する貫通穴が在ったとしても然りである。

カタログスペックにも明示され、ゴルフ雑誌等で話題にされる重心位置、重心深度や高さ、重心距離にヘッドの慣性モーメントが設計値や、本来プレーヤーに有効にコントロールされるべきファクターに「異物」と言って過言ではない「アジャスター」が装着されている。

スウィングバランスが数字合わせ、辻褃合わせの仕上げならばカタログの数値を信用して購入する事は意味がなく、後々に重心位置を動かせる(動かす)事実を消費者は知っておくべきである。

鉛シートをヘッドのいろいろな箇所、さまざまな量を貼ることで球筋に影響があることは知られている。しかし、完成したヘッドの設計値とはかけ離れた「アジャスト重量」の異物をシャフトの先端に突っ込んで仕上げている事はこれも詐欺行為に類するではないのか?

アイアンクラブのバランス然りで、ネックにバランスが仕込まれている場合が殆どであって、工房クラフトマン各人によってはネックの「アジャスター」を装着することで「重心位置をコントロールする」との考えがあるようだが、それではセット内で番手によって多く、少なく装填量がまちまち、それぞれ重さ、大きさの違うアジャスターは重心位置を番手で変化させる行為なのか?と、問いたい。

「アジャスト」とは聞こえが良い響きであるが、今どきCNC加工されたヘッドは3Dキャドで設計されているので、重心位置はもともと最良の位置にセットされているし、鍛造ヘッドであっても精度の良い金型、研磨、重量管理がしっかり出来ていれば問題無く、アジャストの必要は無い事になる。

シャフトとヘッドをすでに装着したクラブにグリップを装着する寸前になってから予定するスウィングバランスまで、バット部の解放された穴から鉛粉、タングステン/ウダーをシャフト先端に放り込む技法は最悪な状況となる。

シャフト内径部の底には接着剤が少なからず沈殿して、嵩上げされた位置に重量物が装填されれば重心はヘッドのX、Y、Z方向位置で考えればバックフェースの形状やネックの長さによらず、見た目以上に操作性の難しいクラブに変化せざるを得ない状況となる。

また、外から見て好都合であり、実は難癖のある点はスウィングバランスがあまりにも奇麗に揃えられる事で、消費者は何か特別な技法があり、その工房の工作レベルが高いと勘違いする事にもなる。とある工房では、先端に残った接着剤を「ロングシャンクのドリルで奇麗にさらってから鉛粉を入れているので大丈夫」と、聞かされてきたプレーヤーも過去に存在した。

ナショナルブランド大手の量産品が抱える宿命や一部のゴルフ工房製クラブに見られる、粗悪とまではいえないが組み立て技法や構造的な一部欠陥を持ったクラブに見合った対価以上の金を払って購入される消費者に罪は一切なく、我々業界側の人間が真つ当な商材、それは一律水準以上の製法技術、規格管理されたクラブを消費者に提供する事が大切だと考えるのですが、皆さん如何でしょうか?